

孤児院ボランティアツーリズムを問い直す ——規範的アプローチを超えて——

Rethinking Orphanage Volunteer Tourism
: Beyond the Normative Approach

薬師寺浩之*

要 旨

開発途上国で行われている孤児院ボランティアツーリズムに関する学術的研究は、近年順調に蓄積されている。これまでの研究は、特定の孤児院施設やツーリストに焦点を当てた実証的な研究が大半を占めていたが、近年では規範的なアプローチ（孤児院ボランティアツーリズムを所定の枠組みに従って評価すること）を基にした研究が増加傾向にある。後者の研究では、特に開発援助という規範的な枠組みの中で見た場合、孤児院ボランティアツーリズムが受益者である孤児院の子供に負の影響を与えることを主張する。ツーリストの滞在期間の短さ、スキルの低さ、ボランティア空間の無秩序さなどが悪影響の根源となり、孤児院ボランティアツーリズムは失敗した開発ツールであるという批判である。この規範的アプローチに基づいた批判的研究には、様々な限界があることも分かっている。特に善意をもってボランティアに参加したツーリストの（個人にとって）意味があり感情的な経験を真っ向から否定する論調であり、実際には幅広い孤児院ボランティアツーリズムの実践や経験を見逃してしまう恐れがある。研究者は、一方では経験を考慮し、他方では正義、倫理、不平等、新植民地主義、新自由主義、開発

* 奈良県立大学地域創造学部准教授

などのより抽象的な問題を分析することが求められる。つまり、今後の孤児院ボランティアツーリズム研究においては、規範的アプローチを超えた考察が必要である。

そこで本稿では、孤児院ボランティアツーリズムの本質を新植民地主義や新自由主義などの社会理論を踏まえつつ抽象的に理解することで、規範的アプローチでは捉えきることができない孤児院ボランティアツーリズムの実践や経験の複雑さを、グローバルな政治経済や文化の枠組みから理解する。

Abstract

Academic research on orphanage volunteer tourism in less developed countries is steadily accumulating in recent years. While the majority of previous studies have been empirical in nature, focusing on specific orphanage institutions and tourists, an increasing number of recent studies have been based on a normative approach. This approach aims to evaluate orphanage volunteer tourism according to prescribed indicators and frameworks. When orphanage volunteer tourism is evaluated according to the normative framework of development assistance, most studies conclude that it makes negative impacts on host communities especially on the beneficiary orphanage children. The poor volunteering skills of the tourists and the disorderly nature of the volunteer space are the reasons for this criticism. There is repeated criticism that orphanage volunteer tourism is a failed development tool. However, critical orphanage volunteer tourism research based on this normative approach has been found to have some limitations. In particular, it tends to dismiss the meaningful and emotional experiences of tourists who volunteer with good intentions. It may miss a wide range of volunteer tourism practices and experiences. The researchers should consider experiences on the one hand, and analyze more abstract issues such as justice, ethics, inequality,

neocolonialism, neoliberalism, and development on the other. In short, future research on orphanage volunteer tourism needs to go beyond the normative approach.

Therefore, this paper will provide theoretical understandings of the nature of orphanage volunteer tourism. It takes into account social theories such as neocolonialism and neoliberalism. In doing so, we can understand the complexity of the practices and experiences of orphanage volunteer tourism within the context of global political economy and culture, which cannot be captured by normative approaches.

キーワード：孤児院ボランティアツーリズム、規範的アプローチ、新植民地主義、新自由主義、第三の空間、ケアの倫理

Key words : orphanage volunteer tourism, normative approach, neocolonialism, neoliberalism, third space, ethics of care

1. はじめに

開発途上国で行われるボランティアツーリズムの活動には、教育支援、児童（孤児）支援、高齢者・疾病者支援、自然保護活動、建設作業や施設整備など、様々なものがある。それらの中でも特に先進国のボランティアツーリスト（以下ツーリスト）に人気がある活動が、孤児に対する支援、つまり孤児院でのボランティア活動である（薬師寺、2017a）。孤児院ボランティアツーリズムに参加する人々の主要な動機は、子供の貧困という地域の問題を少しでも改善できるように貢献したい、というものである。このように、ツーリストはボランティアや支援を提供する意図を示し利他性（貢献）を伴う博愛的な行動をとるものの、その行動の裏には多少なりとも内面的で快樂主義的¹⁾なニーズを満たそうとする利己的（自己中心的）な満足を求める思惑が

あることも分かっている (Thompson, 2022)。思惑とは、ボランティア活動を通して自分自身を理解する (自分探し)、感動的な体験をする、運命的な出会いをする、などの他に、支援対象者の負の現実へのまなざしを通して自分の運命への優越感を感じる、などである。つまり、ボランティア活動には達成感や優越感、(リアリティの) 充足感など、人を心地よくさせる作用 (feel good factor) が存在し、この心地良さがボランティア活動に人々を誘う大きな要因である。

ボランティアに参加する人達の利他的行動の裏に垣間見れる利己的思惑からも理解できるように、ボランティアツーリズムとはあくまでもツーリズムの一種であり、観光者が旅行中に観光者として何かしらのボランティア活動に従事するものである (大橋、2012)。よって、ツーリストが従事するボランティア活動の内容や期間、技術的力量的の程度は問われないことから、ボランティアツーリズムは開発援助や人道支援の粗野な疑似体験に過ぎず開発途上国に貢献しない、むしろ有害無益であるという批判まで聞かれる (薬師寺、2017a)。

孤児院ボランティアツーリズムに関する学術的研究は、その人気に比例して近年順調に蓄積されている。これまでの研究は、特定の孤児院施設やツーリストに焦点を当てた実証的な研究が大半を占めていたが、近年では規範的なアプローチ (孤児院ボランティアツーリズムを所定の枠組みに従って評価すること) を基にした研究が増加傾向にある (Sin, Oakes, & Mostafanezhad, 2015)。後者の研究では、特に開発援助という規範的な枠組みの中で考察すると、孤児院ボランティアツーリズムがホストコミュニティ (特に受益者である孤児院の子供達) に負の影響を与えることを主張する。先述の通りツーリストのスキルの低さに加えて滞在期間の短さ、さらにボランティア空間の無秩序さなどが悪影響の根源となり、孤児院ボランティアツーリズムは失敗した開発ツールであるという批判が聞かれる。

この規範的アプローチに基づいた批判的孤児院ボランティアツーリズム

研究には、様々な限界があることも分かっている。特に善意をもってボランティアに参加したツーリストが実感する「深い」経験に対する喜びや満足感、自己成長感など（個人にとって）意味がある感情的な経験を真っ向から否定する論調であり、実際には幅広いボランティアツーリズムの実践や経験を見逃してしまう恐れがある。孤児院でのツーリストのボランティア経験を取るに足らないもの、と見なすことは、孤児院ボランティアツーリズムの可能性を理解する障害要因であるかもしれない。ボランティアツーリズムの研究者は、一方では経験を考慮し、他方では正義、不平等、新植民地主義²⁾、新自由主義³⁾や開発などのより抽象的な問題を分析することが求められる。つまり、今後の孤児院ボランティアツーリズム研究においては規範的アプローチを超えた考察を行い、ボランティアツーリズムの複雑さと十分に折り合いをつける必要がある。より広範なツーリズムと同様に、ポスト規範的な分析フレームでアプローチされる必要がある（Sin et al., 2015）。

そこで本稿では、孤児院ボランティアツーリズムの空間や構造、影響などを規範的なアプローチから理解した後、規範的アプローチを超えて新植民地主義、新自由主義、経験、倫理、美、責任などに関わる理論的側面から孤児院ボランティアツーリズムを問い直す。ボランティアツーリストのモビリティは、一般的な国際旅行者のそれと同様にグローバルがローカルを通じて社会的に構築されるものであることから、ボランティアツーリストのモビリティは、抽象的なもの（すなわちグローバルな構造とプロセス）と具象的なもの（すなわち場所に基づく経験）双方が関連しあって構築されていると考えられる（Sin et al., 2015）。Sin et al. (2015) の指摘に従って、第二章と第三章では孤児院ボランティアツーリズムをローカルで具象的なものと捉えたうえで規範的に理解する。第二章では孤児院というローカルな場所に焦点を当て、孤児院を舞台に繰り広げられるボランティアツーリズムの空間と構造を具象的に理解する。第三章では、第二章での考察を踏まえつつ孤児院ボランティアツーリズムの批判点（規範的アプローチ）を理解する。第四章以降

では孤児院ボランティアツーリズムの本質を新植民地主義や新自由主義などの社会理論を踏まえつつ抽象的に理解することで、規範的アプローチでは捉えることができない孤児院ボランティアツーリズムの実践や経験の複雑さを、グローバルな政治経済や文化の枠組みから理解する。

2. ボランティアツーリズムが実践される孤児院の空間と構造

そもそも孤児院ボランティアツーリズムは、新自由主義的イデオロギー（例えば開発の民営化など）、地元資本や国外資本（主に先進国）の旅行会社、国際的なボランティアツーリスト、先進国の人々の世界の貧困改善に対する認識や関心、セレブリティ⁴⁾、SNSに代表される新しいコミュニケーション技術、地元の起業家、生計を立てることに苦勞している家族、貧困に悩まされながらも勉強しようとする子供達、など多くの構成要素が複雑に絡み合う中で実践されている（Burrai et al., 2017）。図1はボランティアツーリズムが実践されている孤児院の空間とその構造を示したものであり、関係者間の関係性を示している。この空間には主に三者のアクターが存在する。①：ボランティアツーリスト（観光の文脈ではゲスト、ボランティアの文脈では支

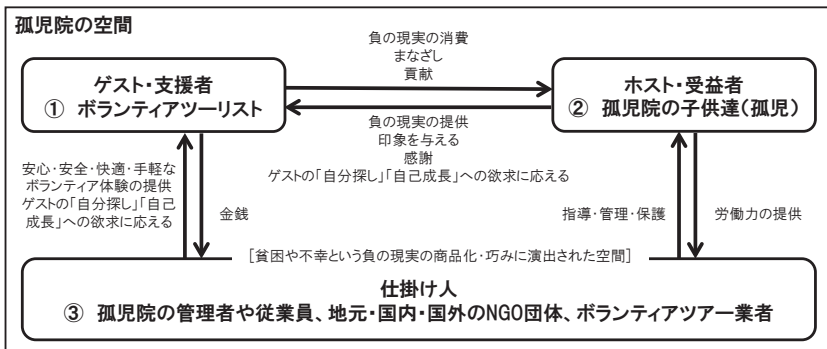


図1 孤児院ボランティアツーリズムの空間と関係者
著者作成

援者)、②:孤児院で支援を受ける子供達(「孤児」⁵⁾) (観光の文脈ではホスト、ボランティアの文脈では受益者)、さらに③:孤児院やボランティアツーリズムを企画・運営・管理する仕掛け人である。この仕掛け人は孤児院の管理者や従業員、孤児院をサポートする地元・国内・国外のNGO団体、さらにツーリストを孤児院に送客するボランティアツアー業者などが含まれる。この空間を理解する際に重要なことは、前章で記した通り、ボランティアツーリズムはあくまでもツーリズムであり、本来非商業的な性格を帯びるボランティアという活動もツーリズムの一環として商品化されビジネスの対象となっていることである。これら三者の関係性を以下で説明する。

● 「①:ボランティアツーリスト」と「②:孤児院の子供達」の関係性

ツーリストは、貧困という不運な状況に置かれた子供達を助けたいという利他的な動機のみならず、負の現実を自分の目で確かめたい、ボランティア体験を通して自分自身は何者なのかを理解したい(自分探し)、さらに自分自身を成長させたいという利己的な動機も持って孤児院を訪問する。この利他的かつ利己的で複雑なツーリストの動機は、受益者である孤児院の子供達との関係に大きな影響をもたらす。孤児院ボランティアツーリズムにおいて批判の対象となる子供をツーリズムの資源(商品)と見なした場合、子供達はツーリストに対してそれが例えパフォーマンス的⁶⁾だったとしても負の現実の提供を行い、さらにツーリストに対して子供達、孤児院、さらに地域や開発途上国全体に関する印象を与えることになる。ツーリストはそれに反応して子供達に対してまなざしを向けると共に、負の現実を消費する。つまり、ツーリストが孤児院訪問以前から抱いていたイメージの再確認や再構成を行う。カンボジアの孤児院を訪問する日本人ボランティアツアー参加者の経験を調べた薬師寺(2015; 2017b)によると、ツアー参加者が抱く子供達に対する最初のイメージは障害や貧困などの負の現実を背負い苦難を抱えていて可哀そう、というものであったが、実際は苦難を全く感じさせないほど

元気で無邪気（さらに素直で真面目）であったという意外な現実を目の当たりにして、子供達に対するイメージを再構成する。さらに、ツアー参加者は子供達と自分自身の日常生活に対する態度を比較することで、自分自身のリアリティに飢え、空虚感に満ちた今までの日常生活に対して自省の念に駆られ、自己改革の必要性を痛感する。

ボランティア活動の文脈で考えると、ツーリストは子供達に対して教育や遊びを通して貢献し、子供達はツーリストに対して言語や笑顔を通して感謝を伝える。さらに、子供達はツーリストの自己成長や自分探しなどの期待を満たすために、ツーリストの欲求に応えようとパフォーマンス的な行動をとることさえある。例えば、毎日のように入れ替わるツーリストによって、同じような内容の初歩的な英語教育が繰り返し行われることがよくある。そのような状況下においても、子供達は初めて学習したふりをすることがある(Brot für die Welt, 2018)。

● 「①：ボランティアツーリスト」と「③：孤児院関係者やボランティアツアー業者（仕掛け人）」の関係

ツーリストは、孤児院を訪問した際に寄付金を渡す。この寄付金は孤児院の生活や教育などに充てられ、孤児院運営における重要な資金源になる。しかし次章で批判する通り、一部の孤児院運営者の中にはツーリストの寄付金を私腹を肥やすために転用し、子供達の生活や教育に充当しない者も存在することを忘れてはならない。ツーリストがボランティアを主目的としたパッケージツアーに参加した場合、旅行代金の一部は仲介手数料としてツアー業者の利益になる。つまり、ツーリストから孤児院関係者やボランティアツアー業者などの仕掛け人には、金銭の流れがある。

一方で、仕掛け人はツーリストに対して、安心・安全・快適かつ手軽なボランティア体験の提供を行う。例えば日本人が対象のカンボジアでの孤児院ボランティアツアーでは、孤児院の昼食で日本食が提供されたり、日本人の

性格や価値観を理解した現地ツアーガイドがツアー参加者の心理的負担を軽減する役割を果たしたりしている（薬師寺、2015; 2017b）。つまり、ツアーリストの自己成長や自分探しをはじめとした動機を満たすことができるように、様々な仕掛けが孤児院関係者やツアー業者などによって行われている。

- 「②：孤児院の子供達」と「③：孤児院関係者やボランティアツアー業者（仕掛け人）」の関係

孤児院関係者は、子供達を指導・管理・保護する保護者的な立場にある。子供達の生活や健康の指導や管理のみならず、いわば子供達が孤児院ボランティアツーリズムの「ホスト」（「資源」でもある）として役割を十分に果たすことを目的に、ツアーリストの欲求に対応できるように指導・管理することさえある。例えば薬師寺（2017b）の観察によれば、日本人が参加するカンボジアでの孤児院ボランティアツアーにおいて、ボランティアツアー参加者の前での子供達の行動が不定期ではあるものの孤児院の管理者によって監視され、ふさわしくない行動をとった子供がいたら別室で叱責するという光景が見られた。

一方で、孤児院ボランティアツーリズムは商品でありビジネスであることを考慮すると、子供達は孤児院関係者やボランティアツアー業者などの管理者側に対して労働力を提供していると解釈することができる。

孤児院の空間は、ツアーリストが子供達の貧困や困難を緩和するために具体的な役割を担っていると実感できるように、さらにその実感を通して自己成長も実感できるように巧みに設計されている（Thompson, 2022）。さらに、交流や関与を感じたいというツアーリストの欲求を満たすことが可能な設計になっている（Conran, 2011）。

3. 孤児院ボランティアツーリズムの批判論

本章では、学術研究やジャーナリズムで数多く指摘されている孤児院ボランティアツーリズムの批判点をまとめる⁷⁾。孤児院ボランティアツーリズムを所定の枠組みに従って規範的に評価することは、近年のグローバルなスケールで公正な社会や観光の構築を目指す潮流に伴って、重要な観点到に位置付けられている。批判論を端的に示すと、表向きは国際貢献を通して開発途上国の貧困や福祉の向上を目指すという聞こえの良いものであるが、実際はボランティアツーリズムの構造や関係者の問題行動等から、様々な批判があるという見方である。そもそも孤児院とは、本来は身寄りのない子供が安全に生活に必要な衣食住や教育を受けられる福祉施設であるが、ツーリストを積極的に受け入れる開発途上国の孤児院は、むしろ子供の安全を脅かしていることがある。つまり孤児院でのボランティアは、多くのツーリストの動機である孤児を助けたい、という良識的な動機とは裏腹に、貧困にあえぐ世界中の子供達にとって貧困の解決をより遠ざける要因となっている。

近年、カンボジア、スリランカ、ガーナといった開発途上国では、貧困率の減少、衛生状態の改善など社会全体の福祉向上により孤児の数は徐々に減ってきている。それにも関わらず、孤児院ボランティアツーリズムの人気にあやかって、孤児院観光ビジネスをする人が増えたことが一因となり孤児院の数は増えている(Pitrelli, 2012)。カンボジアの孤児院数は2005年から2015年の10年間、60%以上増加したと推定される。その増加のほとんどは、いわゆる孤児院ツーリズムのブームに起因するものである(Pelling, 2019)。この事実は、子供の健全な成長に寄与するためコミュニティ内での子供のサポートプログラムや子育て支援プログラムを強化し、その代わり児童福祉施設や孤児院を解体させる傾向にある先進国の動きとは矛盾する。孤児院の増加に伴い、親が安易に子供を預けてしまう問題が浮上している。つまり、親の安易な育児放棄や子育てに対する意識の低下(子供を家族から切

り離すことに対する罪悪感の低下)などが、ボランティアツーリズムの人気引き金となって起こっている。孤児院ボランティアツーリズムの人気の高まりは、本来なら必要のないはずの親子の別居を促進させたり、弱い立場の子供を利用した制度化や商品化につながったりしているのである (Oppenheim, 2016)。

ボランティアツーリズムを受け入れる孤児院の運営者の中には、国内外の支援者からの寄付金やボランティア仲介手数料を集めて私腹を肥やす人がいる。集められた金銭は子供のために使われるのは事実であるが、大部分は寄付を募った人の懐に入ってしまふ (Pitrelli, 2012)。ユニセフの推測によると、孤児院の寄付金全体のうち子供の福祉に使われるのは3分の1以下である (Birrell, 2011)。

ツーリストを積極的に受け入れる支援プロジェクトにおいては、彼らが行う無償の労働力の程度や、ボランティアが支払う斡旋手数料や寄付金の総額次第でプロジェクトの進行具合が変わってくる。本来なら現地住民が担うはずの労働をツーリストが無償で行ってしまうため、現地住民の雇用が危険に晒されることもある。ボランティアツーリズムの企画・運営者にとっては、ボランティア活動を通して自己成長の手段を欲している先進国からの若年層ツーリストの欲求に応えることは、利益に直結する。さらに、ボランティアが無償で労働に従事することは人件費の削減にもつながる (Banning-Lover, 2015)。専門的技術が必要とされる長期間のボランティアプロジェクトとは違い、短期間のいわゆるツーリズムの一環としてのボランティアは、子供に本を読み聞かせるためのスキルや日曜大工のスキルなど、日常のスキルを駆使することでできることが多い (Batten, 2011)。開発途上国では非熟練労働者 (単純労働者) の雇用が過剰にあるため、ツーリストがボランティア活動に従事することは、現地住民の仕事を奪うことになる。

開発途上国における孤児院ボランティアツーリズムは、所定の斡旋手数料や寄付金を払えば誰でも簡単に従事できるシステムになっているため、先進

国諸国の孤児院ボランティアでは当然のように行われている犯罪履歴や身元調査、さらにボランティア活動に関連する資格取得の確認が行われない。このシステムでは、養育や教育に関する専門知識を持たない者が関わることによって引き起こされる孤児に対する支援の質の低下をもたらす (Purvis & Kennedy, 2016)。さらに、小児性愛者や人身売買を目論んだ者までもが容易に孤児に接することを可能にし、孤児の安全を脅かす。ごく少数ではあるが、孤児院の中には子供の労働、性的虐待や人身売買を行っているところもある。

一人当たりのボランティア期間の短さが子供の感情の形成に悪影響を及ぼしている、という指摘もある。二週間ごとにボランティアが入れ替わる孤児院では、子供がツアーリストを信頼し、感情的な繋がりが芽生えた頃、ツアーリストは突然孤児院を去ってしまう。親しくなった大人が突然居なくなってしまうことで、子供は自分が見捨てられたと感じてしまう。子供と接することは子供の発育に好影響を与えるとツアーリストは考える傾向があるが、実際は子供に対して害になることがある (Birrell, 2011)。

このように孤児院ボランティアツーリズムを批判的に捉えると、それは他者の貧困や困窮という負の現実が観光商品化され、支援に対する専門的技術や知識を持たないツアーリストによって消費 (表向きは利他的なボランティア活動ではあるが) され、さらに斡旋手数料や寄付金から得られる利益を追求したい旅行代理店やボランティア斡旋団体のエゴイズムなどによって成り立っているツーリズムの一形態、と言い表すことができる。ボランティア活動や寄付金などツアーリストの善意が、実は開発途上国の孤児院を通じた子供の搾取や人身売買を後押ししていることを受け入れるのは難しい。しかし残念ながら、このような人道的欲求を収益化することで、実際には壊滅的な結果と搾取の悪循環につながる可能性は十分に考えられる (Higgins-Desbiolles, Scheyvens, & Bhatia, 2022)。つまり、開発援助という規範的な枠組みの中で孤児院ボランティアツーリズムを見た場合、特に受益者である孤児院の子供

に負の影響を与えることは明らかである。孤児院ボランティアツーリズムは失敗した開発ツールであるという批判は絶えない。

4. グローバルな政治経済や文化の枠組みから理解する孤児院ボランティアツーリズムの本質

4.1 孤児院ボランティアツーリズムの新植民地主義的性格とその再考

孤児院ボランティアツーリズムは新植民地主義（ネオコロニアリズム）的な実践であることは、多くの文献で指摘されている（Butcher & Smith, 2015）。孤児院ボランティアツーリズムを新植民地主義的に考察した場合、それは第一世界が第三世界の貧しくて疎外された対象の幸福に責任を持つことが前提で成り立っている、と考えられる（Sin, 2010）。つまり、第三世界が劣っているというイデオロギー的な前提が存在し、この前提は父権的な白人救世主義を支える。白人救世主義は、白人が自らの主体性と博愛をもって有色人種を周縁から主流へと導くものと考えられ、有色人種を自助努力のできない存在と見なし、幼児的あるいは本能的に生き延びる不幸な存在にさえしてしまう傾向がある（Higgins-Desbiolles et al, 2022）。さらに、自分達で発展を達成することができない開発途上国社会に対して、より高い文化レベルを持つ西洋はある程度の文明をもたらすことが責任である、という考えである白人の責務（white man's burden）という考え方は、新植民地主義を道徳的な義務として提示し、白人による介入を強化する（Butcher & Smith, 2015）。ツーリスト達が自分達を文明の輸出者とは思っていなくても、孤児院ボランティアツーリズムのマーケティングで顕著にみられる「善良な西洋人ボランティアがアジアやアフリカの子供達に幸せを運んでいる」というイメージは、ボランティア体験を新植民地主義として批判する際に大きな焦点になる（Mowforth & Munt, 2003）。アジアやアフリカなどの開発途上国は、白人のエゴが都合よく投影される空間である。アメリカやヨーロッパの誰で

もアフリカに行けば神のような救世主になれるし、少なくとも自分の感情的な欲求を満たすことができる。多くの人が、「変化をもたらす」(making a difference) という旗印のもとにそれを行ってきた (Higgins-Desbiolles et al, 2022)。

Guiney & Mostafanezhad (2015) は、開発途上国のツーリストが西洋の孤児院を観光するという逆の状況を、孤児院を喜んで訪問する西洋人のツーリストは想像できるだろうか、と疑問を呈する。大多数の西洋人ツーリストにとって、想像を絶するものであろう。カンボジアのような孤児院ボランティアツーリズムが盛んな国々では、差異や他者を目撃したいという欲求が非常に強いあまり、欧米からのツーリストはそうした場所を訪れることによって生じる差異の前提について熟考しない。本章第4節で考察する通り、白人至上主義の考え方が無ければ、開発のための相互学習と行動は可能であるだけでなく、私達全員が直面する複数の将来の危機に対処できるかもしれない (Higgins-Desbiolles et al, 2022)。つまり、白人至上主義は新植民地主義的であり健全な国際交流や開発の妨げになるものである。

孤児院ボランティアツーリズムの新植民地主義的实践に対する反植民地主義的な抵抗運動は、子供を対象とした人権擁護団体を中心に展開されている。例えば、子供の権利保障と拡大を図ることを目的に1994年カンボジアで設立されたNGO団体 Friends International は、孤児院でのボランティア活動や孤児院訪問、孤児院の子供が行う文化公演に参加するツーリストに対して、カンボジアの子供達と自国の子供達を区別していることに疑問を投げかけ、孤児院の子供達を観光資源として扱うことをやめるよう求めている。さらに、持続可能で倫理的な観光の実現のために世界的に活動を展開していた英国のNGO団体 Tourism Concern (2018年活動停止) は、孤児院に無資格のボランティアを派遣するツアーオペレーターを阻止する目的で、孤児院観光に反対するキャンペーン Tourism Concern: Action for Ethical Tourism を行った。孤児院ボランティアツーリズムに対する抵抗運動は、地域の社会組

織から抵抗が生まれるよりも、国際的に活動しながら開発途上国社会に深く入り込んでいる NGO 団体が中心になって展開する (Guiney & Mostafanezhad, 2015)。国際 NGO による抵抗運動は、この業界の正当性と持続可能性に大きな課題を投げかけている。

このような反孤児院ボランティアツーリズム運動は、近年グローバル化した新自由主義経済の浸透が進む開発途上国における孤児院の商品化と、その結果として生じた孤児院ツーリズムに対する社会的動揺の表れであると解釈できる。この解釈に関して、Guiney & Mostafanezhad (2015) はハンガリー人の経済学者であるカール・ポランニー (Karl Polanyi) の『二重の運動』論を用いて理論的に説明している。『二重の運動』論とは、新自由主義的市場社会における深刻な社会的動乱が社会保護運動という形で振り子式の抵抗の反動を引き起こす、と説明するものである。開発途上国では、伝統的にコミュニティや地元の宗教施設が孤児のための第一のセーフティネットとなってきたが、近年では民間施設が子供のケアを担うという市場責任の形態に移行しつつある。この背景には本章第3節で説明する通り、新自由主義がもたらした政治の衰退と、その穴を埋めるために民間主導の慈善活動が台頭したことがある (Vrasti & Montsion, 2014)。とはいえ、前章で説明した通り近年の孤児院ツーリズムにおける無秩序な子供の利用の拡大は著しく、孤児院の腐敗、子供達が不謹慎な施設運営者の収入手段として利用されていること、さらに子供への感情的な影響は、子供の人権を擁護する団体から強い反発を受ける結果となった。つまり、孤児院ボランティアツーリズムにおける『二重の運動』は、子供のケア市場に侵食して子供を搾取している新自由主義的性格を帯びた孤児院ボランティアツーリズムに対して、児童の人権擁護団体が孤児院観光産業の道徳性と正統性に挑戦する抵抗運動を繰り広げていることを説明する。子供は客体化され、孤児院が提供するバケットリスト的なボランティア活動の機会を通じて消費される商品となる。他の商品と同じ様に人間を「商品」として扱おうとすれば、必然的に根深い不満や抵

抗につながるであろう。Guiney & Mostafanezhad (2015) による『二重の運動』論を用いた反孤児院ボランティアツーリズム運動に関する考察は、規範的アプローチを超えて孤児院ボランティアツーリズムを描き出す際には、批判論で取り上げられることが多い新植民地主義的視点のみならず、次節で詳述する通り新自由主義的視点からの考察も不可欠であることも示唆している。

今まで説明してきた孤児院ボランティアツーリズムが新植民地主義的な性格を帯びていることは、ボランティアツーリズムの批判論における定説である。しかし、反孤児院ボランティアツーリズム運動を掲げる国際 NGO のみならず、ツーリスト自身も反植民地主義的な考えを表明することがある。ツーリストの孤児院ボランティア経験に関する話には、過度な消費主義や精神的な次元を欠いた冷たいものと見なされがちな合理主義など西洋社会の様々な欠点が描かれ、開発途上国のコミュニティから学ぶことがたくさんあるとする文化相対主義的発言がみられる。開発途上国社会の現実を目の当たりにして自分達の社会が築いた歴史的な搾取と環境の過ちを痛感し、植民地主義に対する罪の意識を表明する者もいる (Butcher & Smith, 2015)。このようなツーリストは、自国の文化に自己批判的で、むしろ受け入れ先の生活様式に敬意を払い、体験から得た真実を自国に持ち帰ろうとする。ここでは、新植民地主義的なボランティアツーリズムの言説で明白にみられる、文明や進歩の階層的な概念は排除されている。Vrasti (2012) は、ツーリストは不平等な物質的・歴史的条件を多文化的な感性に置き換えていると論じている。文化相対主義的にボランティアツーリズムを考えることが、他の社会に対する仮定 (特に援助の必要性に関する仮定) を強力なものにしているのである。訪問先の社会に対する同情的で時には尊敬に満ちた主張は、文化的な観点から違いを再認識させ、貧困を根本的に合理化するのに役立つのである。つまりツーリストの文化相対主義的視点は、貧困に対するまなざし、特に美的なまなざしの強化につながり、途上国社会の現実に対する誤った認識

につながる危険性がある。このようなツーリストの多文化相対主義の根底にあるのは、現代西洋社会に特徴的な近代性（科学、合理性、物質主義）に対する幻滅であり、近代先進国社会の恩恵を開発途上国の植民地遺産や先進国国内の悪質な新自由主義と結びつけて敬遠しているようである（Butcher & Smith, 2015）。

今まで本節で説明したことは、孤児院ボランティアツーリズムは新植民地主義的である、という主張である。確かに新植民地主義的視点は、開発途上国におけるボランティアツーリズムの前提を形成する上で重要である。一方で、孤児院ボランティアツーリズムを新植民地主義的視点だけで議論すると誤解を助長する可能性がある。本章第3節で説明する通り、新自由主義社会がもたらしている政治の衰退が孤児院ボランティアツーリズムというライフスタイル志向の変革の機運を醸成していることから、新自由主義的視点からも孤児院ボランティアツーリズムを論じることも重要であろう。

4.2 新自由主義社会における孤児院ボランティアツーリズム

孤児院ボランティアツーリズムは新植民地主義的性格を帯びているだけでなく、現代のグローバルな社会を覆いつくす程に影響力を持つ新自由主義（ネオリベリズム）的成長を反映したものでもある。市場原理が支配する世界において、ボランティアツーリズムはグローバルな市場原理がもたらす不平等に挑戦したいという願望さえもパッケージ化し、「倫理的」市場の一部として販売されている。この事実は、新自由主義イデオロギーと無関係ではない（Conran, 2011; Vrsti, 2012; Mostafanezhad, 2014; Butcher & Smith, 2015）。

新自由主義的社会思想の拡大は、個人主義や利己主義の強化によって集団的な価値観や願望が不在となる。これらの不在の反動は、個々の消費者に帰属する責任のメカニズムの活性化をもたらす。さらに、持続可能性、倫理、社会正義に焦点を当てたオルタナティブな消費の活性化や、オルタナティブ

な消費の一形態であるボランティアツーリズムをはじめとした「責任ある観光」の活性化ももたらす。社会よりも個人に焦点を当てることで、政治的アジェンダの変化が強調される。このアジェンダは、社会で良いことをする個人の役割を優先させ、同時に公共的場面での道徳的義務を軽減させる。Vrasti & Montsion (2014) は、個人とそのコミュニティを結びつける責任の関係は集团的な絆や社会的義務に基づくものではなく、ボランティア活動のような気まぐれな倫理的・感情的原則に基づくものである、と説明する。つまり、倫理、配慮、責任は個人的なプロジェクトの一部となるが、それらはボランティアツーリズムビジネスによって媒介される (Burrai & Hannam, 2018)。言い換えるなら、「他者に貢献したい」という単純な利他主義でさえも、ツーリストは市場性のある機会を通じて行っているのである。開発という社会的な問いは市場化され、ボランティアツーリズムやフェアトレードといった倫理的な開発戦略は市場における重要な商品になった⁸⁾。

上述の通り、新自由主義は個人主義化を強化したが、同時に小さな政府の推進に伴う開発の民営化ももたらした。既存の開発主体である政府、国際機関、既存の NGO で構成される三本の柱に加えて、第四の柱と呼ばれる民間主導の新しいアクターが参入してきている (Develtere & De Bruyn, 2009)。この民間主導の開発には、民間企業が運営する孤児院や孤児院ボランティアツアー業者なども含まれる。こうした民間の開発支援は、積極的関与と熱意は認めるところであるが、しばしば本質的な知識と経験を欠いている。一方で様々な可能性を秘めており、従来の開発組織よりも水平で融和的、寛大かつ耐久性のある性質のパートナーシップを開発途上国社会にもたらす可能性もある (Develtere & De Bruyn, 2009; Higgins-Desbiolles et al, 2022)。孤児院ボランティアツーリズムの台頭は、開発の民営化と NGO 化というトレンドを強く反映したものである。

ここまでの議論で重要な点は、これまで政府主導で政治的問題と見なされてきた開発問題が、私的な感情や私的な利益、個人の道徳によって解釈され、

政治的な枠組みから切り離されるようになったことである。孤児院ボランティアツーリズムは、社会的・政治的問題に対して個人のライフスタイルが介入することで成り立っており、次節で説明する通り個人のライフスタイルの介入は政治的背景の希薄化を反映していると考えられる。

4.3 衰退した主体

この節では孤児院ボランティアツーリズムが台頭した一要因である新自由主義的社会における政治的背景の希薄化について、Butcher & Smith (2015) が提唱する『衰退した主体』(diminished subject) の概念を手掛かりに考察する。これは新植民地主義と新自由主義に加えて、孤児院ボランティアツーリズムを理解する際に重要な第三のキーワードである。

ボランティアツーリズムに見られる限定的な開発観は、開発の個人化とともに開発の政治性からライフスタイルへの後退を示すものである。政治や現代社会に対する認識不足や幻滅が蔓延しているため⁹⁾、変革的な開発は不可能であり、また望ましいものでもないという感覚が強まっている。前節で紹介した通り、西洋社会が自国の文化に幻滅するにつれ、開発途上国は自然や持続可能性に関して学ぶことができる場所として示されるようになった。20世紀における先進国の進歩的だった開発を拒否し、経済成長の恩恵に対する願望が無くなりつつある (Butcher & Smith, 2015)。このような新自由主義社会における広範囲にわたる政治の流れの中で、『衰退した主体』が位置づけられる¹⁰⁾。

『衰退した主体』の特徴の一つである私的な感情や個人の道徳観が開発問題に侵入し、政治的な枠組みから切り離されていることは、孤児院ボランティアツーリズムで見られる貧しい子供達の生活への親密で治療的な介入¹¹⁾ という行為にも垣間見れる。ケア、自尊心、愛、そして相互の文化的成長が一貫して強いテーマである (Butcher & Smith, 2015)。開発途上国の「普通の子供」は政治的背景がなく、犠牲者であり、無邪気であることが強

く印象づけられる。スポーツをする、抱きしめる、微笑む、そして単に子供達と一緒に時間を過ごすことが、支援や変化をもたらす方法としてよく挙げられる。しかし、ツーリストが教育や養育に関する専門知識を持っていることは期待できない。子供達と関わり、自信をつけ、彼らの生活に喜びをもたらすことに価値があると考えられている (Butcher & Smith, 2015)。

孤児院ボランティアツーリズムのマーケティングにおいては、子供達や地域社会がツーリストの訪問を肯定的にとらえたメッセージが一般的である。しかし、子供達と喜びを共有することは、物質的な苦難を軽減することにはならない。また、世界の状況やそれを変える方法に関する知恵を与えるものでもない。共感的な経験による「地球市民」は幻想的であろう。その描写は、ツーリストとその受け入れ先が喜びと笑顔を通じて美德の共同体で結ばれているというものであることが多い。しかしその共同体の中では、贈り物をする側と喜んで受け取る側というように、それぞれの主体が異なって定義されている。子供への注目は、政治的・社会的主体性の低下、つまり『衰退した主体』を反映している。困っている子供達の世話をしたい、援助をしたいという単純な衝動は、ごく自然なことであり決して否定することは出来ない。しかし、子供を助けたいという私的な衝動の強さとそうすることに伴う親密さは、貧困削減という政治的な答えの探求を、配慮、親密さ、喜びの共有の探求に置き換えてしまい、さらに治療的な介入を強調することになる。開発途上国の社会問題の解決には繋がらないのである (Butcher & Smith, 2015)

利他主義、慈善事業、人間の基本的な連帯感、人間のかげがえのない衝動であり、ボランティア活動を通して表現することができる。しかし、このような重要であるが政治的でない人間性の特性を、開発という領域で政治的な意味を持たせることは、私的な慈善活動を政治的戦略と混同させたり、個人の自発性を政治的行動と混同させたりすることになる。ライフスタイルは政治ではないし、ボランティアツーリズムは開発の一形態であるとは言い難

い。

全体を俯瞰すると、ボランティアツーリズムに見られる問題はより広いグローバルな社会的、政治的な問題を反映していると考えられる。ボランティアツーリズムに見られる問題は、このニッチ市場の倫理性に対する批判だけでなく、開発という政治問題の後退も含まれる。

4.4 『第三の空間』と『ケアの倫理』概念の可能性と限界

孤児院ボランティアツーリズムは、ツーリストの「開発途上国の困っている子供達に手を差し伸べたい」という純粋な人道的衝動でさえ新自由主義の文脈に取り込んでしまうこと、また民間の開発援助ともいえるボランティアツーリズムの流行は、新自由主義社会における政治の衰退が影響していることを説明してきた。また、孤児院ボランティアツーリズムは新植民地主義的な性格を帯びるものでもあることも説明した。このような批判的議論が渦巻く状況下において、孤児院ボランティアツーリズムの実践はどうあるべきであるのか考察する。さらに、その善い実践に対する批判的視点も考察する。

第2章で説明した多様な利害関係者の思惑が渦巻きながら成立する孤児院というボランティアツーリズムの空間は、政治理論家の Homi Bhabha が提唱する『第三の空間』的な場所であるべきであることを指摘する (Wearing and Darcy, 2011; Butcher & Smith, 2015)。『第三の空間』とは、アイデンティティとは移り変わり、交渉可能なハイブリッドな空間と文化を通じて形成されることを前提に、人々が抑圧の文脈から離れて集まり、より本物の文化と出会うことができる可能性を生み出す場であると定義される。そこではアイデンティティの新しい兆候が示され、単一または共同体としての自己存在の戦略のための場が提供される。この中間的な空間は、支配的な植民地文化や抑圧的な言説に対する抵抗の場として機能する可能性がある。つまり、排除された声が聞こえ、新しいアイデンティティが探求され、オルタナティブなコミュニティが形成される場である (Butcher & Smith, 2015)。

『第三の空間』においては反覇権的な交流様式が可能になることから、ツーリストと彼らが支援しようとする人々（孤児院の子供達）との出会いが相互に豊かになり、文化交流が促進されると考えられる。『第三の空間』のツーリストは単に眼差しを向けて受動的に行動することを超えて、その場所の双方向の貢献者になる個人であるとみなされる。つまり、ウェルビーイングの目標を追求するために受益者（子供達）や孤児院の運営者やスタッフと一緒に働く能動的なツーリストである。この空間では、多くのツーリストが期待する生活様式の変革を経験することで得られる自己発見と自己理解がより得られやすくなり、ボランティア経験は人を育てるというボランティアツーリズムの意義にもつながる。規範的視点を基軸としたボランティアツーリズム研究では過小評価されがちな、ボランティア活動という個人的で感情的な体験に対する喜びや満足感、さらに体験を通して実感される自己成長感などは、この『第三の空間』的性格を帯びた孤児院ボランティアツーリズム空間でより実感できるだろう。さらに孤児院ボランティアツーリズムにおける新植民地主義や新自由主義の前提や思い込みに挑戦し、新しい社会的・政治的思想を生み出すことも可能になる（Wearing & Darcy, 2011; Butcher & Smith, 2015）。

『第三の空間』としての孤児院ボランティアツーリズム空間におけるツーリストと子供達や孤児院スタッフとの関係に焦点を当てた場合、『ケアの倫理』という概念の重要性が浮き彫りになる。『ケアの倫理』は自己と他者の利益が混在するケア関係を提唱し、さらに文化的多様性をより高いレベルで尊重し、受容することを推奨する。ジェンダー、人種、階級、民族、宗教、国家、文化的グループ間の不平等な関係にも対処しようとし、異文化を尊重したり多様性を受け入れたることで新たな視点を提供する。さらに、経済的利潤の最大化を追求することよりも、全てのステークホルダーの利益を考慮することによって、公正な配分を追求する。そうすることで、長期的で持続可能な経済運営を目指そうとする。『ケアの倫理』は「利己的な個人」と

「人間性」の両極端の間に位置し、ケアをする側とされる側の利益は単に競合するのではなく、お互いに重要な存在として関係し合う。支援者であるツーリストは完全に利他的である必要はなく¹²⁾、自己と他者の間の利害の結合は許容されるため、孤児院ボランティアツーリズムにおいては利他的動機と利己的動機の両方を持つことが可能である (Lee & Zhang, 2020)。

Lee & Zhang (2020) は、持続可能性のトリプルボトムライン (経済・社会文化・自然環境) を拡張して、持続可能な社会構築に資するボランティアツーリズムを示す三角錐モデルを提示している (図 2)。ケアは、このトリプルボトムラインにおける 3 本の柱を強化し、ホストコミュニティの継続的発展の可能性を高める重要な要素として機能する。既存のトリプルボトムライ

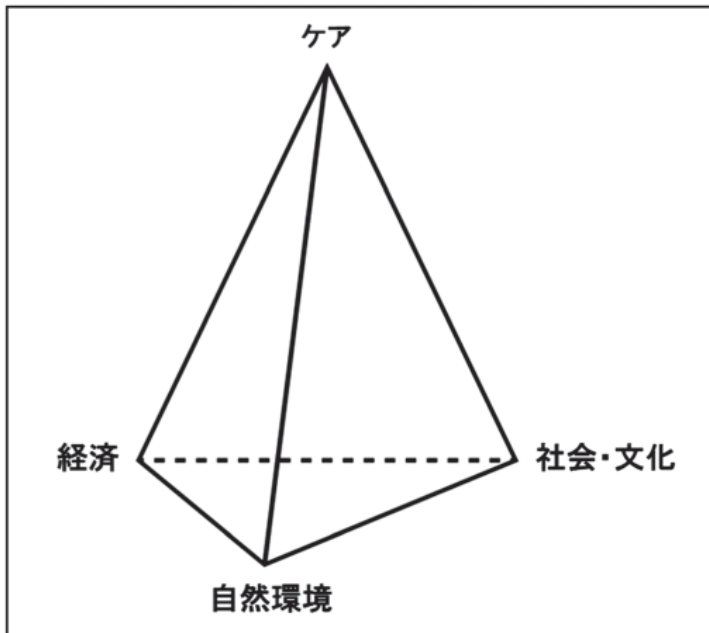


図 2 持続可能な社会構築に資するボランティアツーリズムを示す三角錐モデル
Lee & Zhang (2020) を基に著者作成

ンのフレームワークにケアを組み込むことで、孤児院ボランティアツーリズムの関係者は互いのニーズだけでなく、受益者である子供達の生活する社会や環境の構築や子供達の幸福にも注意を払うことができるようになる。つまり、持続可能な発展に貢献するのである。

孤児院ボランティアツーリズムにおける関係者間の相互関係の理解には、「care for」と「care with」を区別することが重要である。「care for」は、単に誰かの世話をする仕事に従事することを意味し、介護・支援者は行為に参加する積極的な当事者とみなされる。対照的に、「care with」（共にケアする）はケアする人（介護者や支援者、ボランティアツーリストなど）は背景化され、ケアを受ける人と共にケア関係、実践、空間を創造し、コミュニケーション、対話、相互性、連帯が重要視される。ケアを受ける側は、笑顔のようなシンプルな反応だけでもケア関係を維持することができる。孤児院ボランティアツーリズムの場合、ツーリストは単に地域をケアするだけでなく、子供達や孤児院関係者と一緒にケア関係を共創する。ケア関係の共創のためには、お互いの気持ち、ニーズ、欲求、思考に注意を払うことが重要である（Lee & Zhang, 2020）。

このように、『第三の空間』や『ケアの倫理』は孤児院ボランティアツーリズムの可能性を見出す概念であるが、利他主義を商品化することで成り立つこのツーリズムの形態においては、これらの概念を適用することは決して容易ではない。適用可能な孤児院ボランティアツーリズムの特徴は、非商品化され、非営利ベースで組織化されたものに限るであろう。つまり地元コミュニティと協力する非政府組織などの非営利ベースの孤児院ボランティアツーリズムは、商品化された観光という市場主導の支配的な枠組みの外に存在し、利益の追求に対する優先順位が低いため、オルタナティブな選択肢が提供されることになる（Wearing, 2001）。このような状況では、利他主義と連帯に対する前向きな衝動が、新自由主義的ではない本来の文化交流につながる可能性がある。『第三の空間』や『ケアの倫理』は、抑圧と不平等に

加担する市場や大量消費に対抗するものとして提示される (Butcher & Smith, 2015)。

『第三の空間』は代替的経済空間の創造でもあり、新自由主義的な性格を帯びた市場との関係に挑戦する。しかし、公正さの名の下に市場に挑戦するこのアプローチは、結局は開発そのものを否定することになる。このようなスタンスに基づく小規模で局地的な開発には、市場だけでなく大規模な開発に対する深い幻滅が表れている。つまり、政治的主体についての概念が希薄化していること、または『衰退した主体』の表れでもある。主体は国や政治ではなく、地域や文化として提示される。『第三の空間』では、開発途上国の人々は自分達の利益のために行動する政治的主体ではなく、文化間の相互理解を促進する存在、または先進国の人々が自信や自尊心を得る存在として見られる。新植民地主義や新自由主義の前提は、『第三の空間』において破壊されるかもしれないが、治療的介入やウェルビーイングを必要としている第三世界のイメージに置き換えられている。つまり、開発途上国の人々に対する見方が、独立と民族自決の主体から、グローバルなアイデンティティ・ポリティクスの中核へと変化しているのである。開発のため、あるいは開発の可能性に関する幅広い議論を復活させるための『第三の空間』概念の野望は、結果として非常に限定的なものにしかなり得ないのである (Butcher & Smith, 2015)。

5. おわりに

本稿では、孤児院ボランティアツーリズムの本質を新植民地主義や新自由主義などの社会理論を踏まえつつ抽象的に理解することで、規範的アプローチでは捉えきることができない孤児院ボランティアツーリズムの実践や経験の複雑さを、グローバルな政治経済や文化の枠組みから理解した。

新植民地主義や新自由主義は、社会的・政治的实践としての孤児院ボラン

ティアツーリズムを理解するうえで重要な理論である。新植民地主義は、発展途上国に対する固定観念の上にボランティアツーリズムが成り立っていることを理解するうえで重要である。新自由主義的思想の拡大は、個人主義や利己主義の強化をもたらす一方で集団的な価値観や願望を後退させ、さらに社会における政治的なビジョンも制限する。これらの後退や制限の反動は、個々の消費者に帰属する責任のメカニズムの活性化をもたらし、さらに持続可能性、倫理、社会正義に焦点を当てたオルタナティブな消費の一形態である孤児院ボランティアツーリズムをはじめとした「責任ある観光」の活性化ももたらした。孤児院ボランティアツーリズムをグローバルな政治経済や文化の文脈で理解するうえで、新植民地主義や新自由主義のみならず、『衰退した主体』という概念も有用であることを指摘した。『衰退した主体』は、孤児院ボランティアツーリズムが政治的で信念が強い開発援助よりも、政治的展望や利害関係を排除した抽象的な価値観に置き換えられていることを映し出す (Butcher & Smith, 2015)。孤児院ボランティアツーリズムは、開発という政治的問題に取り組もうとする個人的な使命を伴うが、それはケアと責任という私的な美德に基づくものである。ツーリストが抱く困っている子供達の世話をしたい、援助をしたいという単純な衝動は、権力や階級、集団的な政治という概念から切り離された反政治的な時代における活動として理解するのが良いだろう。孤児院ボランティアツーリズムは、公的政治から私的経験の領域への後退を示すもの、また政治的・道徳的代理権の衰退の表れでもある (Butcher & Smith, 2015)。

2020年に発生した新型コロナウイルス感染症のパンデミック危機以前、発展途上国の経済発展を支える重要な柱の一つは観光だった。2020年、観光のサプライチェーンがほぼ完全に遮断されたことで、観光への過度の依存が国家の発展を阻害する要因になることが明確に認識されるようになった。しかしコロナ禍以前から、新しい中産階級を惹きつけてきたオルタナティブツーリズムが、必ずしも持続可能な開発の成果をもたらすとは限らないこと

は指摘されていた。それどころか、貧困を持続させむしろ強化しかねないことも数多くの研究者によって指摘されてきた (Mowforth & Munt, 2003)。オルタナティブツーリズムの一つである孤児院ボランティアツーリズムが開発途上国社会に貢献できるように移行するためには、結局のところ新植民地主義や新自由主義的な国際システムの大幅な再構成が必要であろう。しかし、依存関係から前向きな未来を共同構築するための相互連帯へと少しずつでもシフトするには、『第三の空間』や『ケアの倫理』に代表されるような良心化の取り組みは決して無視することができない。

謝辞

本研究はJSPS科研費 JP26760025, JP 20K12442の助成を受けたものです。

注

- 1) 快楽主義とは、快楽を追求する一方で苦痛を避けることを求める道徳観である。観光者の快楽とは単純な心地よい身体感覚を指すのだけではなく、良い仲間や素晴らしいエンターテイメントなどの社会的・美的快楽、さらにボランティアツーリストに見られる他者への貢献の結果得られる心地よい気持ちや満足感などの喜びなども含まれる。
- 2) 新植民地主義 (ネオコロニアリズム) とは、第二次世界大戦以降アジア・アフリカ地域の国々が植民地支配から解放 (独立) したものの、新経済体制のもと経済・社会基盤が脆弱なこれらの国々が旧宗主国を中心とした先進国との間で支配と従属の関係を続けざる負えない状況に陥り、富の取奪、搾取が維持、強化されていく新しい植民地体制のことである (藤巻, 2014)。一方で、ポスト植民地主義 (ポストコロニアリズム) とは、植民地主義の余波によってイデオロギー的な遺産が形成されることであり、現代社会の文化的・政治的関係の一部であり、生きた遺産でもある (Butcher & Smith, 2015)。
- 3) 新自由主義とは、国家による福祉・公共サービスの縮小 (小さな政府、民営化) と、大幅な規制緩和、市場原理主義の重視を特徴とする経済思想のことである。国家の役割が縮小し、官民のネットワークが複雑に絡み合うことで、人間や非人間的な様々な現象が商品化され、市場ベースの管理システムが多様化するプロセスでもある (Duffy, 2008; Burrai, Mostafanezhad, & Hannam, 2017)。資本移動を自由化するグローバル資

本主義は、新自由主義を先進国のみならず開発途上国を含めた世界中に広げた。

- 4) 米国の女優アンジェリーナ・ジョリーは開発途上国で慈善活動を行うと共に、カンボジア人・ベトナム人・エチオピア人の子供と養子縁組をしている。彼女の活動や行動は世界中で話題となると同時に、開発途上国の貧困イメージを強化することにもなり、多くの一般人がボランティアツーリズムを行うきっかけになった。
- 5) 孤児院で暮らす子供の4人に3人以上、約77%が少なくとも片方の親が生きている (Guiney & Mostafanezhad, 2015)。つまり孤児院で暮らす子供の大部分は、厳密な意味での孤児ではない。
- 6) 一部の孤児院運営者は無理やり子供達にみすばらしい格好をさせ、貧困を演じさせていることがある。物乞いをするを強制したり、さらに酷い孤児院であれば子供達は意図的に栄養失調で健康状態が悪い状態で生活させたりすることもある。このような「演出」が施される理由は、寄付や贈り物という形でより多くの支援を引き出すためである (Pitrelli, 2012)。子供達の負の現実を目の当たりにしたツーリストは、より多くの支援をしなければいけないと思ってしまうのはごく自然であろう。さらに、一部のツーリストは孤児院に対して施設が貧弱で身なりがだらけた見からに貧困な子供が住むところ、というステレオタイプなイメージを持って、またそのような状況を目撃することを期待して訪問する。この期待に応えるために、あえてこのような演出が施されているという指摘もある (薬師寺, 2017b)。
- 7) 孤児院ボランティアツーリズムをめぐる矛盾と批判に関しては、薬師寺 (2017a) が詳細に紹介している。この文献は英国の主要新聞社がオンライン上に掲載している孤児院ボランティアツーリズムを批判的に論じた記事の内容を分析し、記述内容の傾向をまとめたものである。英国では国際支援をはじめとしたチャリティーが盛んに行われ、ボランティアツーリズムの歴史が長く、さらにボランティアツーリズムに関する批判的研究が盛んに行われている。
- 8) 貧困や環境破壊などの市場の失敗への対応は新しい倫理的ニッチという形をとり、市場の失敗と同じように倫理的ニッチにもやがて限界が訪れる。つまり、市場は道徳的な消費者の要求に応えるためにこれまで以上に倫理的な製品を提供し、新自由主義的な政策と実践の拡大に寄与しているのである。このようなことから、消費と行動という私的行為が新自由主義社会の強化に加担していると考えられる (Butcher & Smith, 2015)。
- 9) 政治に対する幻滅と方向感覚の喪失が、開発に対する幻滅に反映されることがよくある。この幻滅は、ポスト開発、代替開発、グリーン開発、反開発、コミュニティ開発など、開発に関する多くの接頭語の増加として現れている (Butcher & Smith, 2015)。
- 10) ボランティアツーリズム、フェアトレード、チャリティー番組、平和構築を目指した人道的イベントなどが近年の開発における表舞台で目立つが、これはある種の非政治的なテーマである。差し迫った政治的・社会的問題に対処する能力、さらにそれを達

成するための民主的で論争的な公的フォーラムを促進する能力も低下しており、このようなことから『衰退した主体』を垣間見ることができる。さらに主体性の喪失を最も端的に表しているのは、政治や開発を目的としたボランティアツーリズムの議論において、国や地域レベルの民主的な制度が重要視されなくなっていることである (Butcher & Smith, 2015)。

- 11) Pupavac (2001) は人道的介入との関連で、開発途上国の貧困を政治ではなく、治療という観点から見ている。以前は貧困とその緩和のためには政治的要素が強い援助が唯一の焦点であったが、最近ではトラウマに対処するための心理学的介入がはるかに一般的になっている、と指摘する。このような治療的モデルは、開発よりもむしろ人々の生活や心理に介入しようとするものであり、開発途上国社会の自律性の低下をもたらすと主張する。
- 12) 行動経済学における社会的選好モデルによると、利他性は二種類に分けられる。一つ目の「純粋な利他性」は、他人の幸福度が高まることこそが自分の幸福度を高める、つまり他者の満足こそが自分の満足である、と考える。純粋な利他性を持つ人は、自己を犠牲にしてでも他者の幸福のために尽くそうとすることから、燃え尽き症候群に陥る可能性が高いことが指摘されている。もう一つの利他性である Andreoni (1990) が提唱するウォーム・グロー (warm-glow) は、自分が他人のためにする行動そのものから幸福感を感じるという温情効果である。各人が快楽を得たい、幸せになりたいと考えるのは当然であることを前提に、自分が行っている行為自体が喜びと考える。大多数のボランティア活動従事者の利他性は、このウォーム・グローに関連する。孤児院ボランティアツーリズムにおける活動が、ツーリスト (ボランティア活動従事者) と受益者 (子供達や孤児院関係者等) 共に有益であるのならば問題にならない、と考えることができる。ツーリストが自分のため (自分の利己的な動機を満たすため) に頑張ることが、結果的に子供達や社会全体のためになるのであれば、ボランティアツーリズムにおける規範的アプローチ研究でしばしば批判される、利己的動機を悪と考える傾向は望ましくないと考えられる。この考えは、自己中心的に自分らしく生きることが結果的に誰かのためになっているのであれば、結果的に信用が増えるという自己中心的利他の考えとも関連する。

参考文献

- Andreoni, J. (1990). Impure altruism and donations to public goods: A theory of warm-glow giving. *The Economic Journal*, 100 (401), 464-477.
- Banning-Lover, R. (2015, June 2). Seven questions you should ask before you volunteer abroad. *The Guardian*, Retrieved 4 September, 2022 from <https://www.theguardian.com/education/2015/jun/02/seven-questions-you-should-ask-before-you-volunteer-abroad>

- Batten, R. (2011, May 4). Volontourism: Helping hands on holiday. *The Independent*, Retrieved 4 September, 2022 from <http://www.independent.co.uk/travel/holidays/volontourism-helping-hands-on-holiday-2278368.html>
- Birrell, I. (2011, April 11). The scandal of orphanages in tourist resorts and disaster zones that rent children to fleece gullible Westerners. *The Daily Mail*, Retrieved 4 September, 2022 from <http://www.dailymail.co.uk/debate/article-1375330/Orphanages-Haiti-Cambodia-rent-children-fleece-gullible-Westerners.html>
- Brot für die Welt. (2018). *From Volunteering to Voluntourism: Challenges for the Responsible Development of a Growing Travel Trend*. Retrieved August 25, 2022 from https://www.tourism-watch.de/system/files/document/Profil18_voluntourism_final_en_0.pdf
- Burrai, E., Mostafanezhad, M., & Hannam, K. (2017). Moral assemblages of volunteer tourism development in Cusco, Peru. *Tourism Geographies*, 19 (3), 362-377.
- Burrai, E., & Hannam, K. (2018). Challenging the responsibility of 'responsible volunteer tourism'. *Journal of Policy Research in Tourism, Leisure & Events*, 10 (1), 90-95.
- Butcher, J., & Smith, P. (2015). *Volunteer Tourism: The lifestyle politics of international development*. London, UK: Routledge.
- Conran, M. (2011). They really love me!: Intimacy in volunteer tourism. *Annals of Tourism Research*, 38 (4), 1454-1473.
- Develtere, P., & De Bruyn, T. (2009). The emergence of a fourth pillar in development aid. *Development in Practice*, 19 (7), 912-922.
- Duffy, R. (2008). Neoliberalising nature: Global networks and ecotourism development in Madagascar. *Journal of Sustainable Tourism*, 16 (3), 327-344.
- 藤巻正己 (2014) 「11. ポストコロニアリズム」大橋昭一・遠藤英樹・神田孝治編『観光学ガイドブック』(pp.162-167) ナカニシヤ出版
- Guiney, T., & Mostafanezhad, M. (2015). The political economy of orphanage tourism in Cambodia. *Tourist Studies*, 15 (2), 132-155.
- Higgins-Desbiolles, F., Scheyvens, R., & Bhatia, B. (2022). Decolonising tourism and development: from orphanage tourism to community empowerment in Cambodia. *Journal of Sustainable Tourism*, DOI: 10.1080/09669582.2022.2039678
- Lee, H. Y., & Zhang, J. J. (2020). Rethinking sustainability in volunteer tourism. *Current Issues in Tourism*, 23 (14), 1820-1832.
- Mostafanezhad, M. (2014). *Volunteer tourism: Popular humanitarianism in neoliberal times*. Farnham, UK: Ashgate.
- Mowforth, I., & Munt, I. (2003). *Tourism and sustainability: Development and new tourism in the Third World*. London, UK: Routledge.

- 大橋昭一 (2012) 「ボランティア・ツーリズム論の現状と動向——ツーリズムの新しい動向の考察」『観光学』6: 9-20.
- Oppenheim, M. (2016, August 23). JK Rowling condemns 'voluntourism' and highlights dangers of volunteering in orphanages overseas. *The Independent*, Retrieved 4 September, 2022 from <http://www.independent.co.uk/news/people/jk-rowling-twitter-voluntourism-volunteering-in-orphanages-risks-a7204801.html>
- Pelling, O. (2019). *The secret world of modern-day slavery*. Retrieved August 28, 2022, from <https://oliverpelling.com/australia-modern-slavery>
- Pitrelli, M. (2012, February 3). Orphanage tourism: help of hindrance?. *The Telegraph*, Retrieved August 28, 2022, from <http://www.telegraph.co.uk/expat/expatlife/9055213/Orphanage-tourism-help-or-hindrance.html>
- Pupavac, V. (2001). Therapeutic governance: psycho-social intervention and trauma risk management. *Disasters*, 25, 358-372.
- Purvis, K., & Kennedy, L. (2015, August 13). Gap year volunteering: how to do it right. *The Guardian*, Retrieved 4 September, 2022 from <https://www.theguardian.com/global-development-professionals-network/2015/aug/13/gap-year-volunteering-how-to-do-it-right>
- Sin, H. L. (2010). Who are we responsible to? Locals' tales of volunteer tourism. *Geoforum*, 41 (6), 983-992.
- Sin, H. L., Oakes, T., & Mostafanezhad, M. (2015). Traveling for a cause: Critical examinations of volunteer tourism and social justice. *Tourist Studies*, 15 (2), 119-131.
- Thompson, J. (2022). Volunteer tourism fields: spaces of altruism and unsustainability. *Current Issues in Tourism*, 25 (5), 779-791.
- Vrasti, W. (2012). *Volunteer tourism in the global south*. London, UK: Routledge.
- Vrasti, W., & Montsion, J. M. (2014). No good deed goes unrewarded: The values/virtues of transnational volunteerism in neoliberal capital. *Global Society*, 28 (3), 336-355.
- Wearing, S. (2001). *Volunteer tourism: experiences that make a difference*. Cambridge, UK: CABI.
- Wearing, S., & Darcy, S. (2011). Inclusion of the "othered" in tourism. *Cosmopolitan Civil Societies Journal*, 3 (2), 18-34.
- 薬師寺浩之 (2015) 「海外孤児院ボランティアツアー参加者の経験と開発途上国に対する印象に関する考察」立命館大学地理学教室編『観光の地理学』(pp.281-303) 文理閣
- 薬師寺浩之 (2017a) 「孤児院ボランティアツーリズムをめぐる矛盾と批判——英国主要新聞社による報道内容からの考察」『立命館文学』649: 59-77.
- 薬師寺浩之 (2017b) 「リアリティ充足手段としてのカンボジア孤児院ボランティアツアーにおける演出とパフォーマンス」『観光学評論』5 (2): 197-213.

